

れ等の死んだ人々に対するお経がわりに軍歌を歌った。

台湾要塞砲戦記

鹿児島県 砂田慶洲

昭和十六年九月二十六日下関重砲兵連隊に入隊、二日後下関を出港して長崎港着船内にて一泊、翌日長崎出帆、台湾基隆に向い航行、五日後に基隆より高雄に上陸、同訓練所で一泊。

翌日、高雄要塞重砲兵連隊に入隊、翌日から鳥松という島で訓練にはいる。砲種は十一年式高射砲で、二か月くらいで編成がえがあり第四中隊に配属された。中隊本部は林子辺というところであり、その先に港子甫という要塞砲の砲台があった。そこで約一年勤務したのち、連隊本部勤務となり、上等兵に進級し、六か月ぐらいこの中隊本部にいた後、十センチカノン砲係となりました。

その間、港子甫駐屯地守備の時、沿岸砲陣地の沖合を敵の潜水艦が潜望鏡を出して半潜水航行しているのを発

見、野砲二門で連続発射攻撃したが、命中の確認はできなかった。

昭和十九年九月ごろホウビトウという中隊本部のある上空を、グラマンとB 24の編隊が通過して中隊の北側を爆撃し、戦闘機は機銃掃射をくわえてきた。これに応戦して激戦をまじえたが飛行機に女性が搭乗して戦闘動作をしているのには異様の感があった。

また陣地の沖合を日本の機帆船団が十六隻日本に向け航行していたが、敵のグラマンの編隊がこれを発見、急降下反覆攻撃をくわえた。日本の船舶守備兵は機銃小銃等小火器を以て応戦していたがつぎつぎと撃沈されていった。

最後の一兵となるまで勇猛果敢に応戦してつぎつぎと戦死して行くさまを目前にみて、なんの応戦もできない、なんの甲斐性もない沿岸砲兵を許してくれと、涙を流しながら掌を合わせるしかなかった。如何に心ははやっても野砲ではどうしても弾がとどかないのです。

野砲の射程はせいぜい五千メートルか六千メートルであるが確実に命中する有効距離は三千メートルぐらいで

あるのでどうにもならない。この時ぐらい高射砲が一門でもあればとおもったことはない。一隻また一隻と海中に姿を消して行く船を目前にして涙を流した。

一年ぐらいで兵長に進級、さらに一年をへて伍長任官、同日連隊本部付となる。私の部下は伍長一人、兵長二人、一等兵一人であった。

十九年十月ごろ日本軍の駆逐艦が米軍に空爆され、必死の防戦をしたが米爆弾を十発ぐらい受け、艦が真二つに割れ海中に沈んでいくのを見て、高射砲があればと残念に思った。

海岸砲は敵の上陸作戦にのみそなえての砲であるので、飛行機に対しては効果がないのである。十五センチカノン砲がそなえてあるけれども、これでは弾がとどかない。私は視力がよいので目測で〇〇方角より敵機〇〇機接近中、と報告してから観測班がしばらくしてから報告するという状態だった。

連隊本部では私は作戦書記という任務であり、連隊長と作戦将校の指示を私が筆記してそれを戦闘部隊に流す仕事である。

最もはげしい戦闘をしたのは高雄市を守備するとき、

敵の戦爆連合の大編隊が現れ、重軽爆弾の雨を降らせたときである。彼らの砲声と爆撃音、高雄市は火災地獄となつて、この世の終焉をみるようであった。反覆爆撃をくりかえす無数の敵機に対して、対空火器は高射砲がわずかに四門、他は軽火器、うつつうつつ、うちまくつて、それでも敵機十六機を撃墜したのであるが、高雄市は一面の焼野原と化した。また高雄港に停泊していた艦船、輸送船等も一隻残らず撃沈、撃破されてしまった。

部隊は山のうえに穴を掘り防禦設備をして、敵の上陸をげい撃する作戦であった。連隊長は私をそばに呼び寄せ、

「お前は絶対に生きていなければならないぞ。部隊が最後という時になれば俺は割腹して自殺をするから介錯をしてくれ。最後にこの拳銃でお前のコメカミを撃つて自殺せよ」

と、それが部隊が玉砕を覚悟して連隊長の死を以て最後の締めくくりをするということです。